

島の教育 × インターネット

島外の先生に学ぶ、 島と島で学ぶ 島に学べる環境を つくる意味

東大NETアカデミー 松川来仁さん
離島経済新聞社 編集長 鯨本あつこ

小さな島には都会ほどの学習環境がなくても、
子どもたちや島の未来のために学習環境は重要。
インターネット技術の発達により、島内だけでの学習にとどまらず、
島外の先生から学ぶ仕組みや、
遠く島の子もたちと一緒に学ぶ取り組みが広がり始めています。
インターネットを活用して離島の子もたちに向けた塾を開く
東大NETアカデミーの松川来仁さんに、本紙編集長が話を聞きました。



編集長(以下、編)：東大NETアカデミーでは与那国島や北大東島などでテレビ電話をつかった塾を開かれています。こういった経緯で始められたんですか？

松川：僕は沖縄生まれなんですけど、沖縄県は小中学校の全国学力テストの結果が7年間連続全国でビリなんです。それも文部科学省が7年前に始めたもので、7年間ビリということはこれまでもずっとビリだったんだろうなと思って……。東京に来て、何に差があったかという、やっぱり学習環境や意識にすごく差があったんです。でも、沖縄には沖縄の良いところもたくさんあって、自然から学べる環境があったり、子どもたちが祭りで主役になることができてたり。

編：そういった部分では、沖縄のなかでも特に離島は濃いんですよね。

松川：だけどやっぱり学習環境は整ってなくて。起業した頃、テ

レビ電話が安価になってきたので、これを活用して事業ができないかなと思い、「埋もれていく才能を埋もれさせない」というコンセプトで塾を始めました。

編：現役の東大生に直接、勉強を教えてもらえる学習環境はすごくいいですよね。

松川：^{よなぐにじま}与那国島は4年目になります。最初はあまり理解してもらえなかったんですけど、2年目くらいで成果が出てきました。

編：どのようなものでしょう？

松川：一番大きな効果は、町営塾が開講したことによって、学習環境が大幅に整ったことです。学習環境が整ったことで、子どもたちの勉強に対する意識が向上してきたことは年を重ねるごとに実感しています。成績面では導入後1年で、中3の全県模試(沖縄県)で県平均を超えることができました。その後はコンスタントに県の平均

値を超えており、文部科学省の全国学力テストでも非常に高い成績をあげています。

編：それはすごい成果ですね。

松川：僕らの位置付けは学校とは別の「家庭学習」です。都市部の子は放課後、当たり前のように塾へ行ったりするのが、島だと放課後はずっと運動していたり。島で色々な話を聞いていくと親世代もそうだったと言いますが、50~60代の方には「もったいないことをした」とも言われました。島の子は祭りや部活で主役になって、人前でしゃべるのも田舎へ行くほど上手です。そういう「人間教育」が学習の両輪の1つとしたら、もう1つの「学力」によって、現実でふるいにかけられてしまって、将来やりたいことを見つけたときに、学力がないために自分には選べないと挫折してしまうこともあるんです。

編：学習する機会がないことは私も島でよく耳にします。今年はまだ

新しい取り組みを始められるとか。

松川：今年9月から沖縄県の事業^{とかしきじま}で渡嘉敷島、^{びまみじま}座間味島、^{はてるまじま}波照間島の3島でテレビ電話を同時につないで授業を始めます。

編：3島同時とはすごいですね。インターネットが一般に使われだしたのはここ3~4年で、テレビ電話で会議するのが一般的になって、遠隔地同士で何かをしようというのはここ1~2年の話ですよ。

松川：そうですね。2年前ではインフラの問題でできなかったですね。

編：遠く島に暮らす子どもたちが一緒に授業を受けるとなると、子ども同士にも張り合いが出そうです。

松川：そう、小さな島だと「井の中の蛙」状態がすごく多くて、島では成績が一番だったのに高校で島外にでるとビリになってしまうことも少なくないんです。

編：子どもたちにとっては島の中が世界だったわけなので、そこでできていけばまあ良かったんですね。でもそこで東京の先生に教わったり、他地域の子もたちと一緒に学べたら島の外のレベルを知るきっかけにもなりますね。

松川：相手もがんばってるぞ！というのが分かりますよね。僕は教育の面で島をまわっているんですけど、どこの島へ行っても「競争がない」とすごく言われるんです。競争がないと人間はがんばりきれない。東京は過度かもしれませんが、島にはなさすぎるんですね。

編：一生その島だけで生きていくなら良いんですけど、今の世の中はそうともいなくて。たとえば将来、子どもたちが役場職員になるとしたら、役場職員として島外の企業とか他地域の人たちと連携して仕事ができるスキルが必要で、そういう人材を育てる学習は島だけでは難しいですね。

松川：バランスが必要ですよ。東京は学習環境が整っているけれど、人間教育のためにすごいお金をかけるんです。自然の中で遊ばせようとか。それは島ではできていて、みんなで集まって祭りをやるとか、悪いことをしたら周りのおじさ

んに怒られるとか。なので、井の中の蛙状態で学習ができないことが、もったいない気がするんです。この子たちがある程度の学力をつけて、社会に出たらすごいリーダーシップをとって活躍できる人材になるんじゃないかと。

編：そうですね。小さな島だと1人が色んな仕事を兼務しているんで、ある意味、東京の仕事よりもマルチタスクですよ。それだけの仕事をこなしながら、さらにリーダーシップをとるとすれば、人間力も学力も必要。これからの島のためにも、島外から学べるような環境は大事ですね。

松川：現実問題、人間性がすごく良いけど学力はありませんといって、さまざまなハードルを乗り越えていくには、ものすごく強い意志を求められるのが現実です。「学」がなくて成功した人もいるにはいますが、あくまでも例外です。現実と照らし合わせていくと、ある程度の学習環境は大人たちが作り出してあげないといけないと思います。

松川 亮仁(まつかわ・らいと)
沖縄県生まれ。東京大学医学部健康科学科、東京大学大学院医学系研究科生物統計学教室卒業。2010年「将来ある子どもたちの学ぶ『才能』を埋もれさせたくない」とフィオレ・コネクション(東大NETアカデミー)を設立。インターネットのウェブ会議システムを活用し、東大生が講師を務める塾を多数の離島で展開している。

海と島でできた日本の姿を 水のつながりから学ぶプロジェクト 『うみやまかわ新聞』はじまりました！

日本は6,852島からなる島国。
本土5島と418島の離島に人が暮らし、
世界6位規模の広大な海に恵まれる海洋国家です。

大きな海の海水は☀️日様の光によって水蒸気となり、雲となり、
雨になって山へ降り注ぐと、川を下ってまた海に流れる。
海と島でできたこの国には、そんな「水のつながり」があります。

日本中を循環する水のつながりは
日本各地に豊かな自然環境を育み、人や物が行き交う道をつくり、
文化や歴史、経済を築いてきました。

この国には地域と地域をつなぐ「海」「山」「川」があり、
そのつながりから生まれた「文化」「歴史」「経済」を知ることは、
それぞれの土地の姿や、日本の姿を知ること。

本土も離島もみんな同じ海のうえ。
日本各地をつなぐ「海」「山」「川」をキーワードに、
離島経済新聞社では新しいプロジェクト
『うみやまかわ新聞』をスタートしました。

離島経済新聞社では、2014度より公益財団法人日本財団の助成のもと、
『うみやまかわ新聞』(事業名称：日本財団海洋教育促進プロジェクト 海と地域のつながりを見つける『うみやまかわ新聞』の制作事業)をスタートしました。
インターネット技術 (ICT) の利活用により、全国各地の地域の子もたち、教育機関、都市部のクリエイターが連携し、
個性豊かな日本の「地域」「ふるさと」をつなぐ「海」「山」「川」を知り、学べる新聞を制作していきます。
詳細や進捗は「季刊 ritokei」およびウェブマガジン「離島経済新聞」にも掲載。
どうぞご期待ください。

www.ritokei.com

